

組合員の作品



絵手紙
あいあい支部 上原 克子



新聞ちぎり絵
みい支部 垣内 規子



写真
豪栄道全勝優勝
凱旋パレード
成田支部 南 貢



写真
ノラちゃんの日向ぼっこ
みい支部 N子

短歌

夢に見る餓死の夫は若きままと涙の笑顔で叔母は言いなき

成田支部 竹内 平

捕虜のわれら乗せてシベリア鉄道をひた走る貨車の行方を知らず

門真東支部 佐々木芳春

電柱の陰に日射しを避けながら第二京阪の信号を待つ

みい西支部 堀 正子

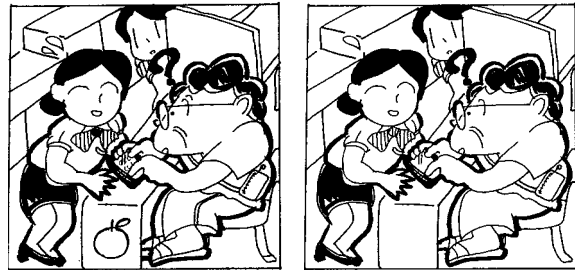
桜葉の散り敷く上に鳩のむれ追う事ならず道端歩む

門真中央支部 兵頭 克己

※12月は1月(新年号)と合併号となります。

まちがいがさし

2つの絵でちがう所は9カ所。よく見てちょうだい?



「答え」は今月号のどこかにあります

守口宿と助郷村

さつき支部 酒井 則行

慶長5年(1600)徳川家康は、東海道の宿をおくように指示し、江戸幕府は寛永19年(1643)の参勤交代までに五街道に「宿次」制度を完成させました。東海道は京都までの53次が有名ですが、その先大坂までも東海道で57次あり、57次目が守口宿(亀田通辺り)でした。

「宿」というと「東海道中膝栗毛」のように旅人の宿場というイメージがありますが、家康が置かせた宿の役目はこれとは別に幕府の通信・運送・宿泊を確実にするためのものでした。「次」は「継」とも書き、枚方宿から受け継いだ幕府の手紙や荷物を無料で大坂まで運ぶ(継ぐ)、反対に大坂から受け継いだものを枚方宿に継ぐ仕事や幕府の公用の役人を無料で本陣に泊める役割でした。

この役目を果たすために、常時「百人、百匹(馬)」(守口宿では馬は免除されていた)を用意しておくように命じられていました。宿だけで百人を置くのは難しいので幕府は、宿を助ける助郷村を指定して宿と助郷村で五十人ずつ(人数の変更もあった)準備させました。

助郷村は、変わることがありましたが長い間、土居村、西橋場村、大枝村、世木村、馬場村、門真三番村、門真四番村が努めました。宿次は、守口宿の人々にも負担でしたが、助郷村には大変な負担でした。農繁期であってもそれに応えなければならず、参勤交代となれば通常以上の人足を出さなければならず、お金を払って他所から人を集めてもらうこともありました。

幕末になると幕府の動きが頻繁になり、宿にも助郷村にもしわ寄せがきました。この負担から解放されたのは明治3年のことでした。

今年、守口宿誕生から四百年というところで、12月に記念の式典が行われます。

